

帰還難民 難しい 母国 順応

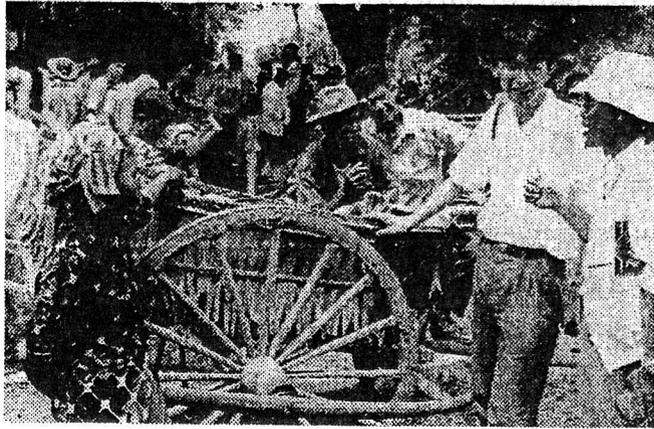
「ブンペン29日萩尾信也」国連平和維持活動(PKO)のためカンボジア入りした陸上自衛隊第一次先遣隊の準備作業が進む中、アジア医師連絡協議会(六カ国二千人)の桑山紀彦医師(山形大医学部精神科)が今月中旬、現地で帰還難民の意識調査を実施した。「土地も仕事もない」と、将来の暮らしに不安を訴える大人。おびえて家に閉じこもる子供たち。調査結果から、故郷を追われ、長期にわたったキャンプ生活が意識や行動面に色濃く影を落としていく実情が浮かび上がる。

カンボジア

尾引くキャンプ生活

「仕事ない」「食料配給ない」

桑山医師は一九八九年十一月から、タイ国境のカオイナンプに入り、難民の意識調査



難民から話を聞く桑山医師(右から2人目)＝ウドンで萩尾信也写す

「一查を続けてきた。」

帰還民の意識調査に取り組み始めたのは今年七月。

キャンプ生活を続けていた

難民の帰還が始まっていた

た。「帰還で、調査を終わ

りには出来なかった。国連

や非政府組織(NGO)が

担ってきた難民事業の結

果はこれから出る」と言

う。

調査の中心は、ブンペン

の西方約四〇キロのウドン

からさらに南方のプロムシ

ロッチ地区。日本語で「険

しい山」の意味だ。「昨年

までポル・ポト支配地区だ

った。先住の村人に国内避

難民、それに帰還民の混住

地区で、周囲は山が迫り地

雷に囲まれている。そこで

帰還した百家族、七百人を

訪ね歩いた。

今回は同地区の二十五家

族に面談した。家に閉じこ

もり、外へ出ようとしな

子供たちは「さくがな」と

「怖い」と答えた。子供の

就学率も大人の就学率も極

めて低い。「学校への行き

方が分からない」「仕事

がない」。キャンプではすぐ

近くに学校があり、大人は

働かなくても暮らせた。

「食料配給を受けていな

い」と多くの大人たちが答

えた。配給の日も場所も知

らない。黙っていても、衣

食住が足りたキャンプ生活

の影響と思われた。

「国連の保護が突然、な

くなったことの影響は予想

以上に大きかった。一歩々

々、難民を順応させていくのがいいが、時間の制約がある。過保護を続けるのも保護を断ち切るのも混乱を起す。継続して調査していかねければ、桑山医師。いったん帰国後、十二月にカンボジア入りし、今後は周辺住民の意識調査もする予定。帰還難民への食料配給などをわたむ声も聞かえ始めた。

